● 読書感想文コンクール　中学生の部 ●

教育長賞

古屋　麻緒（ふるや　まお）楢原中 3 年生

作品名：生きる

図 書:ライオンのおやつ

私は人の「死」について、今まで深く考えた事がありませんでした。また、身近な人を亡くした経験がないので、「死」とはどういうものなのか、想像することができませんでした。

昨日まで元気で普通の生活をしていた人が不慮の事故で急に死んでしまったり、病気と闘いながら、最期まで治療をして病院で亡くなったりする人。人間の死、人の最期は、それぞれ異なるのだと「ライオンのおやつ」を読んで改めて知りました。

「がん」という病気と闘い、余命を告げられ、ホスピス「ライオンの家」で、人生最期の一ヶ月を過ごした女性、「海野雫」がこの本の主人公です。

病院での治療を止めて、残された日々をライオンの家で過ごすことを決めた雫は自分自身で死を受け止めることができ、強い女性なのだと、思いました。私だったら、少しでも長く生きたい、もしかしたら治るかもしれないという気持ちなど、死にたくない思いから病院での辛い治療を選択してしまいます。しかし、雫は「ライオンの家」を選び、残りの人生を穏やかに生きることを決断しました。

この本を読んで一番考えさせられたことは自分の人生の最期の日々をどのように過ごし、人と関わっていくのかということです。病院の医師や家族などは、入院をして治療をしてもらい、少しでも長く生きてほしいと考えると思います。しかし、余命を告げられた者にとっては、辛く苦しい治療を続けるよりも、残りの人生を自分のやりたいことと向き合いながら最期の日々を過ごすことの方が幸せなのだと私は感じました。

雫はライオンの家で、たくさんの人と出会い、おいしいものを食べ、大好きな犬と一緒に穏やかで幸せな日々を送りました。ライオンの家に来るまでは死ぬことばかり考えていた雫が、死を受け入れられるようになりました。しかし、死を受け入れることとは、生きたい、もっともっと長生きしたいという気持ちを正直に認めることでもあるのだと雫は、ホスピスにいる人たちから教えてもらいました。人は生

きている限り、生きたい、もっと生きていたい、死にたくないと思うことが本心であり、願望なのだと強く心に響きました。

雫のライオンの家での生活は、とても充実していて、ほのぼのとしていました。雫のように最期の時が来るまで、穏やかに過ごすことができたら、幸せだろうと思います。また、雫が目標にしていた、「一日一日をちゃんと生ききること。どうせ人生終わるのだから、投げやりになるのではなく、最期まで人生を味わい尽くすこと。」この言葉に一日たりとも無駄に生きてはいけない、一日一日を大切にしていかなければならないと強く思いました。

ライオンの家では、毎週日曜日、入居者が人生最期に食べたいおやつをリクエストする「おやつの時間」がありました。雫は、なかなか決まらずに悩みました。そして、小学生の時、父の誕生日に一人で作ったミルクレープというお菓子を選びました。人それぞれに思い出があり、お菓子を口にした時に、心が暖まり、昔の風景が懐かしく目に浮かび、子供の頃に戻ることができるというおやつの時間に私は感動しました。

そして、雫が、夢の中で、亡くなった母から言われた言葉がとても心に残りました。「何が大事かって、今を生きていることなの。自分の体で感じること。目で見て感動したり、触ったり、匂いを感じたり舌で味わったり。」普通に生活していると、当たり前のことですが、生きていなければできないことです。そして、生きているからこそできることなのだと改めて気づかされました。生きていなければできないことがたくさんあるのだと、生きている意味を学べた気がします。

雫のように、余命を告げられ、自分の意志でホスピスに入り、穏やかに亡くなっていく人は、少ないと思います。医療が発達している現在、治療に専念する人の方が多いと思います。しかし、雫のようにホスピスで過ごすことも、一つの選択だと思います。難しいことだとは思いますが、「ホスピス」という施設があることを、よりたくさんの人に知ってもらいたいと思いました。

世界中には、病気をかかえ、闘いながら、精一杯生きている人たちがたくさんいます。この本を読んで、死について考え、生きることの大切さを知りました。明日が来ることを当り前のように信じて、平凡な日々を送っている。このことが幸せなのだと思います。今、生きている自分にできること、それは一日一日を無駄にせず、やりたい事をして、自分の夢に向かって、精一杯生きること。もし、悩んだり、立ち止まったとしても、諦めずに前を向いて、一歩一歩進み続けていこうと思います。